



concert

ザルツブルク・モーツァルト週間2024

2019年からザルツブルク・モーツァルト週間の総裁を務めるローランド・ビリヤソンが任期を5年延長した。第2期の1年目にあたる今年は、「モーツァルト&サリエリ」というテーマで1月24日〜2月4日まで60公演が催された。その集大成となった2月3日は「モーツァルト、ハイドン&サリエリ」という題にふさわしい音を守り続けるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に、南米・スペイン勢が新風を巻き起こす。モーツァルト「交響曲第32番」では老舗のオーケストラと、無駄に動き回るアンドレス・オロスコ「エストラーダが水と油のようだったが、チェロのソリスト、ソル・ガベッタが登場するとうまく混じり合った。ガベッタの線の細いチェロはニッキのような濃厚な響きを放ち、ハイドンに最適だ。コンバクトにまとまったアンサンブルはフレージングのみで豪華さを出し、構成力で聴かせる力がすごい。スリリングなカデンツァで第1楽章から聴衆を掌握した。第2楽章のアダージョは豊かなレガートのビロードが張られた宝箱のようだ。そして超速の第3楽章を神々しく、豪華絢爛な「チェロ協奏曲第1番」に仕上がっていた。

後半は、サリエリの《はじめに音楽、次に言葉》とモーツァルトの《劇場支配人》にフランツ・クサヴィエ・モーツァルトの曲まで掛け合わせたプログラムでパス・ティツォ（寄せ集め）という副題だが、指揮者の解説で解り易く仕上がっていた。役者もそろい、作曲家役のナウエル・ディ・ビエロ、詩人役のテオドレ・プラットも



「寄せ集め」という副題を持った後半。左からレヴェク、ピリヤソン、サエンス、オロスコ=エストラダ ©Wolfgang-Lienbacher

よいが、ヘルツ夫人&トニーナ役のキヤサリン・レヴェクとジルバークラング嬢&エレオノーラ役のセレーナ・サエンスが甲乙つけがたく、適役以上だ。コロラトゥーラの技術も、超高音の安定度も、演技力も、歌

詞の際立たせかたも、フレージングも、舞台度胸も、すべてを兼ね備えている。支配人役にはピリヤソンも特別出演し、会場を沸かせた。当音楽祭ならではの、ハイ・レヴェルかつ楽しいプログラムだった。



セミステージのオペラ《皇帝ティートの慈悲》から。演出はピリヤソン ©Wolfgang-Lienbacher

その前日は、例年通り、ピリヤソン演出（今年はベッティーナ・ガイヤーとの共作）のセミステージ・オペラ《皇帝ティートの慈悲》最終日だった。昨年までのダ・ボンテ三部作ではアンドラーシュ・シフの弾き振りだったが、今年はジョルディ・サバル指揮ル・コンセル・デ・ナシオンで新鮮だった。バスルームで転倒したというサバルは杖について登場し、そのせいもあってか、器楽的にはすばらしいアプローチでも、息継ぎの間がなく、古楽歌唱に慣れ

ていないと辛いだろう。そのなかでいちばん光ったのはセスト役のマグダレーナ・コジェナード。アンニオ役のマリアンネ・ベアテ・キールランドもアンサンブルでは機敏な歌い回しで、伸びる声を聴かせた。ハインナ・エリザベス・ミュラーのヴィテッリアとエドガルド・ロチャの題名役は健闘していたが、これから熟していくのを待ちたい。いちばんの主役は、歌手より雄弁だったクラリネットのフランチェスコ・スペンドリーニかもしれない。

■中東生



ウィーン・フィルの公演で聴衆を魅了したガベッタ ©Wolfgang-Lienbacher